The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	楚の遠祖陸終とその妻女嬇の伝説に関する一考察 ：清華簡『楚居』を手がかりとして
Author(s)	徐, 少華
Citation	中国研究集刊. 2016, 62, p. 18-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61980
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊 光号（総六十二号）平成二十八年六月　一八―三〇頁

〔出土文献研究〕

楚の遠祖陸終とその妻女嬇の伝説に関する一考察

――清華簡『楚居』を手がかりとして

徐　少華
（草野友子 訳）

清華大学が所蔵する戦国竹簡（清華簡）『楚居』は、二〇一〇年末に刊行されて以来(注1)、国内外の学術界において大きな注目を集めている。そのため、すでに多くの論文が各種期刊やインターネット上に発表されており(注2)、関連する問題についての深い認識と理解を推進した。しかし、古史が茫漠としていることにより、疑問点は甚だ多く、数多くの問題が詳細な研究や推敲、考古資料による実証を待っている状態である。

本稿は、伝世文献とすでにある研究成果とを結合し、簡文の「季連初降於騩山」の記載と伝世文献に見える「楚人の遠祖陸終が鬼方氏の妹女嬇を娶った」という伝説について分析・検討するものである。『楚居』が提供する情報を用いて、関連する学術上の難解な問題を解決し、楚史・楚文化研究の進展を促したい。

一、陸終が娶った女嬇の族属

伝世文献と出土文献とによると、楚国の王族は、祝融八姓の一人、季連の後裔であり、芈姓であるとされる。『史記』巻四〇・楚世家に次のように言う。

楚之先祖出自帝顓頊高陽。……高陽生稱、稱生卷章、卷章生重黎。重黎爲帝嚳高辛居火正、甚有功、能光融天下、帝嚳命曰祝融。共工氏作亂、帝嚳使重

黎誅之而不盡。帝乃以庚寅日誅重黎、而以其弟吳回爲重黎後、復居火正、爲祝融。

吳回生陸終。陸終生子六人、坼剖而產焉。其長一曰昆吾。二曰參胡。三曰彭祖。四曰會人。五曰曹姓。六曰季連、芈姓、楚其後也(注3)。

(楚の先祖は帝顓頊高陽より出づ。……高陽は称を生み、称は卷章を生み、卷章は重黎を生む。重黎は帝嚳高辛の為に火正に居り、甚だ功有りて、能く天下に光融し、帝嚳は命けて祝融と曰う。共工氏乱を作すや、帝嚳は重黎をして之を誅せしめ、而も尽さず。帝は乃ち庚寅の日を以て重黎を誅し、而して其の弟吳回を以て重黎の後と為し、復た火正に居り、祝融と為る。

吳回は陸終を生む。陸終は子六人を生み、坼剖して焉を産む。其の長ずる一を昆吾と曰う。二を参胡と曰う。三を彭祖と曰う。四を会人と曰う。五を曹姓と曰う。六を季連と曰い、芈姓なり、楚は其の後なり。)

この段の記載は、周代の楚人と太古の祝融集団との淵源関係について明言している。その間には伝説の色彩があるものの、関連する文献と考古資料によってこれを証明すると、主な内容はおおよそ誤りがない。

たとえば、『左伝』僖公二十六年に「夔子不祀祝融與鬻熊、楚人讓之(夔子祝融と鬻熊とを祀らず、楚人之を讓む)。」と、また「帥師滅夔、以夔子歸(師を帥いて夔を滅ぼし、夔子を以て帰る)。」とあり、杜預注に「祝融、高辛氏之火正。楚之遠祖也。……夔、楚之別封、故亦世紹其祀(祝融は、高辛氏の火正なり。楚の遠祖なり。……夔は、楚の別封、故に亦た世よ其の祀を紹ぐ)。」とある。

二〇世紀の一九八〇年代に湖北省荊門市で出土した包山楚簡の卜筮祭祷簡には、「與祷楚先老僮・祝融・鬻熊、各一牂」とある(注4)。老僮が卷章であることによれば(詳細は後述)、簡文に見える三人の「楚先」の順序と名称は文献の記載と一致する。このことから、東周から秦漢時期に至るまで、人々は楚族の起源と展開について比較的よく知っており、関連文献の記載は基本的に信用できるものであることがわかる。

また、『大戴礼記』帝繫に、次のように言う。

顓頊娶於滕氏、滕氏奔之子、謂之女禄氏、產老童。老童娶於竭水氏、竭水氏之子、謂之高禍氏、產重黎及吳回。吳回氏產陸終。陸終氏娶於鬼方氏、鬼方氏

之妹、謂之女隤氏、產六子、孕而不粥（育）、三年、啓其左脅、六人出焉。其一曰樊、是爲昆吾。其二曰惠連、是爲參胡。其三曰錢、是爲彭祖。其四曰萊（求）言、是爲云鄶人。其五曰安、是爲曹姓。其六曰季連、是爲芈姓。……季連者、楚氏（是）也(注5)。

（顓頊は滕氏に娶り、滕氏奔の子、之を女禄氏と謂い、老童を産む。老童は竭水氏に娶り、竭水氏の子、之を高緺氏と謂い、重黎及び呉回を産む。呉回氏は陸終を産む。陸終氏は鬼方氏に娶り、鬼方氏の妹、之を女隤氏と謂い、六子を産み、孕めども粥（育）せず、三年にして、其の左脅を啓き、六人出づ。其の一を樊と曰い、是を昆吾と為す。其の二を惠連と曰い、是を参胡と為す。其の三を錢と曰い、是を彭祖と為す。其の四を萊（求）言と曰い、是を云鄶人と為す。其の五を安と曰い、是を曹姓と為す。其の六を季連と曰い、是を芈姓と為す。……季連なる者は、楚氏（是）なり。）

『大戴礼記』のこの段の話と先に引用した『史記』の記載とを比較すると、おおむね同じではあるが、細かい点が異なる。第一に、『大戴礼記』帝繫の内容はさらに詳細であり、顓頊・老童・陸終らの家系の姻戚関係の旧族を示しているだけでなく、昆吾・参胡・彭祖らの人あるいは支系の名称も記載している。第二に、「老童」が「卷章」に代わっており、裴駰『史記集解』は徐広を引いて「『世本』云老童生重黎及吳回（『世本』は老童重黎及び呉回を生むと云う）。」と言い、また譙周を引いて「老童即卷章（老童は即ち卷章なり）。」と言う(注6)。司馬貞『史記索隠』は「卷章名老童（卷章の名は老童なり）。」と言う。すなわち老童と卷章とは名・字あるいは号の関係に当たる。第三に、『大戴礼記』帝繫は顓頊と老童の間に「稱」の一代がなく、『世本』の記載は『大戴礼記』帝繫と同じであり(注7)、これは記載に欠失があるのか、それともこれらの学者の太古の史実についての見解に違いがあるのかは不明である。

「女隤」については、『史記』楚世家の「陸終生子六人」の句の下に、司馬貞『史記索隠』と『太平御覧』は『世本』を引いて「女嬇」に作り(注8)、隤と嬇とは通用し、ただ偏が異なるのみであることを明示している。

鬼方は、上古時期に北方において強大であった狄族であり、伝世文献・甲骨卜辞・銅器銘文にみな見え、学者たちの研究によると、それは媿姓の族、あるいは「媿姓の国」であるとされる(注9)。

媿姓の「媿」は、文献では多く「隗」に作り、また

「歸」に作る。『左伝』僖公二十三年に「狄人伐廧咎如、獲其二女叔隗・季隗、納諸公子（狄人 廧咎如を伐ち、其の二女叔隗・季隗を獲て、諸を公子に納る）。」と、その杜預注に「廧咎如、赤狄之別種也、隗姓（廧咎如は、赤狄の別種なり、隗姓なり）。」とある。また、『史記』巻三九・晋世家の「狄伐咎如」の句の下に、裴駰『史記集解』は賈逵を引いて「赤狄之別、隗姓（赤狄の別は、隗姓なり）。」と言う。『国語』鄭語は周の太史の史伯が「北有……潞・洛・泉・徐・蒲（北に……潞・洛・泉・徐・蒲有り）」と言うのを載せ、その韋昭注に「皆赤狄、隗姓也（皆赤狄、隗姓なり）。」とある。諸篇が用いている「隗」字は、銅器銘文や古姓によるとすべて「女」を偏とするのが通例であり、実際には「媿」に作るべきである。

淮河中流の北岸、今の安徽省阜陽市の西北にあった古胡国は、文献では「歸姓」を称している(注10)。胡は、金文では「㝬」に作り、一九七八年に陝西省武功県任北村の西周銅器窖蔵から出土した㝬叔簋銘には「㝬叔㝬姬作伯媿媵簋、……。」とある(注11)。

この簋は、㝬叔夫婦がその長女「伯媿」が外に嫁ぐ際に作成した媵器であり、媵器の銘文の字を称する慣例によると、「伯」は長幼の順序、「媿」は㝬国の姓である。「媿」は古くは「愧」に通じ(注12)、また借りに「歸」に作り、『戦国策』秦策一「蘇秦始將連横」章の、「狀有歸色」の句の下の高誘注には、「歸當終愧。愧、慚也。音相近、故作歸耳（帰は当に終に愧ずべし。愧は、慚なり。音相近く、故に帰に作るのみ）。」とある(注13)。帰姓胡国の「歸」は、実は「媿」の同音の仮借字であり、李学勤氏は銘文に見える媿姓の「㝬」は、「まさしく文献中の帰姓の胡国である」と見なしており(注14)、これは信じるに値する。

鬼方が媿姓の国あるいは部族である以上、陸終が娶った鬼方氏の妹は、媿姓の女子に属する。かつて王国維氏は次のように述べている。

《世本》陸終娶鬼方氏之妹，謂之女嬇，《大戴禮・帝繫篇》及《水經注・洧水》條所引作女隤，《漢書・古今人表》作女潰，而《史記・楚世家》索隱與《路史・後紀》所引皆作女嬇，鬼、貴同聲，故餽字亦通作饋，則女嬇、女隤疑亦女媿、女隗之變。……嬇、隤二字其音與媿、隗絶近，其形亦與媿、隗二字變化相同，或殷周間之鬼方已以媿爲姓，作《世本》者因傳之上古也(注15)。

陳夢家氏は王国維氏の説に同意し、さらに「隤・隗・媿・懐都是鬼姓」（隤・隗・媿・懐はすべて鬼姓である）と推測している(注16)。

女隤・女嬇が女隗・女媿の異写である以上、その意味は媿姓の女子であり、すなわち先に引用した『左伝』の「叔隗」・「季隗」、㝬叔簋銘の「伯媿」と近似しており、上古時期の婦の名を国と姓で称すという基本規律を表している。

諸々の記載は陸終が女嬇（媿）を娶って六子を生んだと言っており、季連はその最後の一人である。文中の「生」の字は、生みの母と理解でき、また支系の派生と見なすことができるが、どのような解釈であろうと、陸終の六系には一定成分の鬼方氏の血統が備わっており、芈姓季連の一系も例外ではない。張正明氏は「鬼方は西北民族であり、後世に隗姓の戎人がいる。隗は嬇に通じ、女嬇はつまり隗姓の戎人の女とすべきである。このことから、陸終の集落連盟は、同じ鬼方の集落連盟が婚姻を結んで繁栄してきたものであることがわかる。」と述べており(注17)、これは理にかなっている。

「女嬇（媿）」は戎狄の族の鬼方氏の出身であり、これは疑いないが、鬼方氏のどの支系に属するのか、当時どこに居住していたのか、ということについては、早期の文献中には明確な意見がない。清人の孔広森『大戴礼記補注』に「鬼方、西落鬼戎。宋衷曰、「於漢、則先零羌是也。」（鬼方は、鬼戎に西落す。宋衷曰く、「漢に於いて、則ち先零羌是れなり。」と。）」とあり(注18)、鬼方はすなわち西北に居住していた鬼戎・漢の先零羌であると見なされているが、曖昧ではっきりしない。今、ある学者はこれによって季連の母族の鬼方氏は西羌集団に属し、芈姓であり、また季連の姓は鬼方氏に来源があると推測している(注19)。これについては、羅運還氏がかつて分析して「春秋時代の赤狄、商代の鬼方、季連の母族はみな同一族系であり、……おそらくこれは季連の母族の鬼方氏は西羌集団に属さず、北狄集団に属し、姓は芈ではなく嬇であることを表している」と述べており(注20)、これは信用できる。しかし、女嬇（媿）の族の派系と居住地については、学者はみな言及することが少なく、さらなる分析・検討が待たれる。

二、季連の騩山居住と女嬇の来源の分析

清華簡『楚居』には、「季連初降於鄦（騩）山、氐（抵）于空（穴）窮（窮）。」という記載がある(注21)。「初降」には、楚の始祖が天から降りてきたという神秘的な

色彩がある上に、その族がはじめに居住した地の史実背景もあり、『国語』周語上の「昔夏之興也、融降于崇山（昔夏の興るや、融 崇山に降る）」の記載と近い。その意味は、芈姓の始祖の季連氏は祝融集団から分派した後、はじめに鄀（騩）山一帯に居住していたということである。

「鄀山」はすなわち騩山であり、整理者は『山海経』西山経の「西次三經」が言うところの騩山であると推測しており、この山が「神耆（老）童居之」であるという関係から分析すると、確かに一定の道理はある。しかし、騩山が「三危之山」以西、「天山」以東に位置するという形勢から見ると(注22)、おおよそ今の甘粛省の西境に当たり、文献が記載する祝融集団の故墟、すなわち今の河南省新鄭から嵩山一帯までは、距離が甚だ遠く、人に疑念を抱かせる。

簡文が記載する季連氏がはじめに居住した騩山は、上古時期の中原の名山の一つである騩山と見なすことができる。『国語』鄭語は鄭の桓公とその大臣の史伯が東遷して災禍を避けることについて議論している時のことを記載し、当時の虢・鄶の地は「主芣・騩而食溱・洧（芣・騩を主として溱・洧を食う）。」と言い、韋昭注に「芣・騩、山名。」とある。すなわち、芣・騩の二山を望祭の神主としており、西周時期の「騩山」が中原の望山の一つであり、非常に名声があったことを示している。

『山海経』中山経の「中次七經」には「又東三十里曰大騩之山、其陰多鐵・美玉・青堊……（又東三十里を大騩之山と曰い、其の陰 鉄・美玉・青堊多く……）」と、その郭璞注に「今滎陽密県有大騩山、……（今の滎陽密県に大騩山有り、……）」とある(注23)。清人の郝懿行『山海経箋疏』には、「『地理志』云河南郡密有大騩山、溴水所出（『地理志』は河南郡密に大騩山有り、溴水の出づる所なりと云う）。」とある。また、『荘子』徐無鬼に「黄帝將見大隗乎具茨之山、……至於襄城之野、七聖皆迷、無所問途（黄帝は将に大隗を具茨之山に見えんとし、……襄城の野に至りて、七聖皆迷い、途を問う所無し）。」と、唐の成玄英『荘子疏』に「大隗、古之至人也。具茨、山名也、在滎陽密縣界、亦名泰隗山。……今汝州有襄城県、在泰隗山南、即黄帝訪道之所也（大隗は、古の至人なり。具茨は、山名なり、滎陽密県の界に在り、亦た泰隗山と名づく。……今汝州に襄城県有り、泰隗山の南に在り、即ち黄帝の訪道の所なり）。」とある(注24)。

『漢書』巻二八・地理志上に見える河南郡「密」県については、班固の原注に「有大騩山、溴水所出、南至臨潁入潁（大騩山有り、溴水の出づる所にして、南は臨潁に至り

潁に入る)。」と、顔師古注に「騩音隗、潩音翼。」と(注25)、『説文解字』巻一一・水部潩条に「水出河南密縣大隗山、南入潁(水は河南密県大隗山より出で、南は潁に入る)」と(注26)、『水経注』巻二二・潩水篇の経に「潩水出河南密縣大騩山(潩水は河南密県の大騩山より出づ)」と、注に「大騩、即具茨山也(大騩は、即ち具茨山なり)。」とある(注27)。

この騩山はつまり具茨山であり、また大騩(隗)山・泰騩(隗)山とも呼ばれ、太古の至人の大隗が居住する所として有名であった。それは漢の密県の境に位置し、また襄城と隣接している。

『元和郡県図志』巻五の河南府密県「大騩山」の条に、「在縣東南五十里。本具茨山、黄帝見大隗于具茨之山、故亦謂之大騩山、潩水源出于此(県の東南五十里に在り。本具茨山、黄帝は大隗を具茨之山に見え、故に亦た之を大騩山と謂い、潩水の源は此より出づ)。」と言う(注28)。『読史方輿紀要』と『大清一統志』の記載を結合すると(注29)、唐の密県の東南五十里の大騩山に位置し、今の河南密県・禹県と新鄭の境に接する槐樹嶺・劉垌・史垌などの村一帯であると推測できる(注30)。密県の境内は、この附近に今は大隗鎮があり、大騩(隗)山の所在と密接に関連すると考えられる。

このことから、芈姓季連氏の一系が早期に居住していた「鄢山」(騩山)は、まさにその先祖の祝融がかつて長期的に活動していた今の河南省新鄭と嵩山との間に位置し、またその同族の昆吾・鄶人らの諸支系との距離が遠くないことがわかる(注31)。この史実の確認は、一連の関連する記載とともに裏付けになるものである(注32)。

『荘子』の他に、黄帝が大隗に面会する故事は『抱朴子』にも見え、本書内篇巻一三・極言に「昔黄帝生而能言、役使百靈、……之具茨而事大隗、適東岱而奉中黄(昔黄帝は生まれて能く言い、百霊を役使し、……具茨に之きて大隗に事え、東岱に適きて中黄を奉す)。」と言う。また巻一八地真に「昔黄帝東到青丘、……北到洪堤、上具茨、見大隗君・黄蓋童子、受神芝圖(昔黄帝は東は青丘に到り、……北は洪堤に到り、具茨に上り、大隗君・黄蓋童子に見え、神芝図を受く)。」と言う(注33)。この伝説は古代の道家文献の中に見え、比較的流行していたものであることがわかる。

「大隗」が具茨山に移り住んだことから、具茨山は騩山・大騩(隗)山・泰騩(隗)山とも称される。大隗すなわち大媿・大鬼は、西北鬼方氏の一系が南下してきたものであり、『抱朴子』はそれを「大隗君」と称し、その居住地が「大隗(騩)山」と称されているのはその証

拠であると考えられる。もし大隗が隗山に居住したという故事と筆者の推測とがおおよそ誤っていなければ、氏族社会の晩期に、ある一系の鬼方氏の族人が南に向かって発展し、黄河を越え、中原の中央に進入し、今の密県・新鄭・禹県の境に接する所の具茨山一帯において活動したことを証明していると考えられる。商周時期に、媿姓の族人はさらに南に向いて発展し、相次いで淮河上流地区において媿姓の復・胡・弦の諸国を建立したことも(注34)、大隗すなわち鬼方の支系が早期に中土に進入し、具茨山一帯において活動したという有力な傍証となるであろう。そうでなければ、これらの人々の群れが西北部から中原を越えて淮河上流に到達するのは難しいことである。

黄帝がわざわざ大隗に面会に行ったかどうか、また神芝図を受けたかどうかなどは、必ずしも確実ではなく、パロディーの成分があると見られる。しかし、黄帝の部族と大隗の一系とは同じ中原の土地にいて、隣接していたため、互いに交流があったと考えるのが自然であろう。

鬼方氏の支族の大隗一系がかつて騩（隗）山一帯において活動し、『楚居』が楚の先祖の季連ははじめに騩山に居住していたと言っている以上、両族は同じ一つの比較的小さな区域範囲内にいて、互いの距離は遠くなかった、あるいは互いに隣接していたと考えられる。このようであれば、『大戴礼記』や『世本』などが記載する陸終が娶った鬼方氏の妹女嬇（隤）は、隣接する大隗の族の出身である可能性があると推測できる。まず、大隗・女嬇（隤）はみな鬼方氏の支系の媿姓の族人で、同族同姓である。次に、大隗一系は今の密県・新鄭の間の古具茨之山（騩山）一帯において活動し、さらに陸終の族の中心は今の新鄭一帯にあり、両者は互いの距離が約四〇里前後、往来するには近くて便利であり、相互に婚姻関係を結んでいた可能性が高い。もし陸終氏が近きを捨てて遠きを求め、晋陝北部の鬼方氏の中心地域に赴いて婚姻関係を成立させようとするならば、上古の立ち後れた状態と困難な交通条件の下では、想像しがたいものである。このことから、陸終が娶った鬼方氏の妹女嬇（隤）は、まさしく祝融集団の居住地と隣接する大隗（媿）一系出身の女子であったと見なすことができる。

陸終の後裔の季連氏として、血縁の角度から言うと、陸終の末子である以上、鬼方氏の後裔（外孫）でもあり、その族がしだいに独立・分家した後、最初にその母族が居住する騩山一帯において活動したのは、頼ったり協力を得たりすることを願ったためであり、これは道理

にかなっている。あるいは、陸終の族人の中の最も年少の一系は、はじめはその母族と同居して成長し、たとえ独立して家を興し業を立てた後であっても、なお騩山附近において一定期間、活動していたとも考えられ、これが『楚居』の「季連初降於鄙（騩）山」の歴史的背景なのかもしれない。

結語

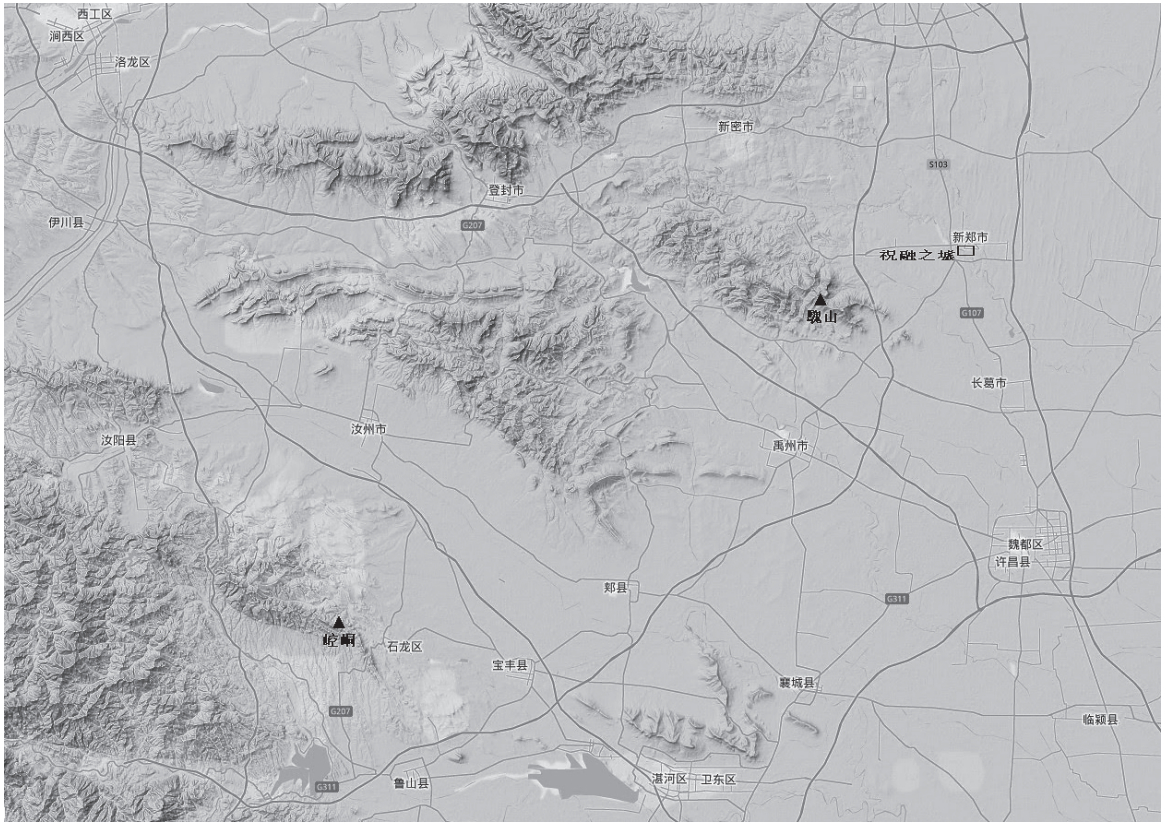
以上の分析の結果、次のことが明らかになった。

清華簡『楚居』が記載する楚人の先祖季連がはじめに降りた騩山は、今の河南省密県と新鄭・禹県の間の古具茨山に位置し、氏族社会の晩期に鬼方氏の支系の大隗（媿）の族人が南下してこの一帯に居住・活動したため、騩（隗）山・大騩（隗）山、あるいは泰騩（隗）山と呼ばれている。これは上古時期の中原で有名な望山の一つであり、非常に名声があった（図1参照）。

歴史・地理の角度から推測すると、『大戴礼記』や『世本』などが記載する楚人の遠祖陸終が娶った鬼方氏の妹女嬇（媿）は、騩（隗）山一帯の大隗の族人の出身であると考えられる。陸終氏が居住する「鄭」（今の河南新鄭）と大隗君が南下後に居住した騩（隗）山とは、互いの距離が四〇里前後で、近隣であったため、往来するのに便利であり、相互に婚姻関係を結んでいたと考えるのは十分可能である。

陸終の幼子あるいは比較的遅くに分かれた芈姓の季連氏として、長期的に騩（隗）山一帯に居住・活動し、その母族の鬼方氏の大隗（媿）一系とは特に親密で頼りにしている間柄であったのかもしれない。季連氏と大隗の族系の間のさらに進んだ通婚・融合もまた免れがたいものであると想像できる。このように、季連の族人は祝融八姓中の他の支系と比較すると、戎狄鬼方氏の血統を濃厚に有していることは明らかであり、これは芈姓楚人の族系の淵源とその文化の痕跡を探る際に軽視できない要素である。

【図１】季連氏早期居住地位置図



注

（1）清華大学出土文献研究与保護中心編・李学勤主編『清華大学蔵戦国竹簡（壹）』、中西書局、二〇一〇年、原寸大図版、二六～二七頁、釈文注釈、一八〇～一九四頁。

（2）李学勤「論清華簡《楚居》中的古史伝説」、趙平安「試釈《楚居》中的一組地名」、李守奎「根据《楚居》解読史書中熊渠至熊延世序之混乱」（いずれも『中国史研究』二〇一一年第一期掲載）参照。

（3）『史記』、中華書局、一九六二年、一六八九～一六九〇頁。引用文の中の横線は、筆者が加えたものである（以下、同じ）。

（4）湖北荊沙鉄路考古隊『包山楚簡』第二一七簡、文物出版社、一九九一年、三四頁参照。このほか、第二三七簡にも見える。

（5）王聘珍『大戴礼記解詁』巻七・帝繫、中華書局、一九八三年、一二七～一二九頁。

（6）『史記』、一六八九頁。

（7）『太平御覧』巻一三五「顓頊妃」条引『世本』、中華書局、一九六〇年、六五五頁。

（8）『史記』、一六九〇頁。『太平御覧』巻三七一「脅」条引『世本』、一七一二頁。

（9）王国維「鬼方昆夷玁狁考」（『観堂集林』掲載、中華書局、一九五九年、五八三～六〇六頁）、陳夢家『殷墟卜辞綜述』、第八章第五節四「鬼方」（中華書局、一九八八年、二七五頁）参照。

（10）『史記』巻三六・陳杞世家、司馬貞『史記索隠』引『世本』、一五八二頁。王符著、汪継培箋『潛夫論箋』巻九・志氏姓、中華書局、一九七九年、四五六頁。

（11）盧連成・羅英傑「陝西武功県出土楚簋諸器」（『考古』一九八一年第二期）参照。

（12）『漢書』巻四・文帝紀に「以不敏不明而久撫臨天下、朕甚自媿」とあり、顔師古注に「媿、古愧字。」とある（中華書局、一九六二年、一二六頁）。

（13）『戦国策』、上海古籍出版社、一九八五年、八六頁。

（14）李学勤「従新出青銅器看長江下游文化的発展」、『文物』一九八〇年第八期。

（15）王国維「鬼方昆夷玁狁考」、『観堂集林』掲載、中華書局、五九一～五九二頁。

（16）陳夢家『殷墟卜辞綜述』、二七五頁。

（17）張正明『楚史』、湖北教育出版社、一九九五年、二一頁。

（18）孔広森『大戴礼記補注』、中華書局、二〇一三年、一三八頁。

（19）一之「楚人源於羌族考」、『青海民族学院学報』一九八一年第一期。趙炳清「楚人先民溯源略論」（『民族研究』二〇〇五年第一期）にも同様の見解がある。

(20) 羅運還『楚国八百年』、武漢大学出版社、一九九二年、四六頁。
(21) 清華大学出土文献研究与保護中心編・李学勤主編『清華大学蔵戦国竹簡（壹）』、中西書局、二〇一〇年、原寸大図版、二六～二七頁、釈文注釈、一八〇～一九四頁。
(22) 郝懿行『山海経箋疏』巻二・西山経、中国書店、一九九一年影印本、二七～二八頁参照。
(23) 郝懿行『山海経箋疏』巻五・中山経、二八頁。
(24) 郭慶藩『荘子集釈』、『諸子集成』第三冊収録、中華書局、一九五四年、三五九～三六〇頁参照。
(25) 『漢書』、中華書局、一九六二年、一五五六～一五五七頁。
(26) 『説文解字』、中華書局、一九六三年、二二五頁。
(27) 『水経注』、上海古籍出版社、一九九〇年、四二八頁。
(28) 『元和郡県図志』、中華書局、一九八三年、一三五頁。
(29) 『読史方輿紀要』巻四七、開封府新鄭県「大騩山」条、中華書局、二〇〇五年、二一七二頁、および『嘉慶重修一統志』巻一八六、開封府山川「大騩山」条、中華書局、一九八六年、九一四五頁参照。
(30) 『河南省分県地図冊』（内部用）、河南省測絵局編絵印刷、一九八二年、五五～五六頁、五七～五八頁参照。
(31) 昆吾・鄶人の諸支系の居地については、詳細は拙稿「論祝融八姓的流変与分布」、湖北省考古学会選編『湖北省考古学会論文選集』（三）、『江漢考古』増刊、一九九八年、一二二～一三九頁参照。
(32) 季連と騩山との関係については、拙稿「季連早期居地及相関問題考析」、『清華簡研究』第一輯掲載、中西書局、二〇一二年、二七七～二八七頁参照。
(33) 『抱朴子』、『諸子集成』第八冊収録、中華書局、一九五四年、五七頁、九二～九三頁。
(34) 詳細は、拙稿「復器・復国与楚復県考析」、『中央研究院歴史語言研究所集刊』第八〇巻第二号（二〇〇九年）、一九七～二一六頁参照。

【附記】本稿は、二〇一五年一〇月一六日・一七日に開催された「出土文献与先秦経史国際学術研討会」（香港大学中文学院主催、香港中文大学歴史系中国歴史研究中心共催、於香港大学百周年校園）、および二〇一五年一一月二二日に開催された中国出土文献研究会の座談会（於大阪大学中国哲学資料室）で発表した論文（原題「従《楚居》析陸終娶鬼方氏妹女嬇之伝説」）に若干の修訂を加え、日本語に翻訳したものである。座談会の開催と『中国研究集刊』への寄稿をご提案くださった湯浅邦弘教授（大阪大学）、通訳・翻訳を務めていただいた草野友子博士（京都産業大学）をはじめとする関係者各位に対し、ここに感謝申し上げたい。

本稿は、国家社科基金重大招標項「周代漢淮地区列国青銅

器和歴史・地理綜合整理与研究」（批准号：15ZDB032）、および武漢大学重大委托項目「両周漢淮地区列国青銅器和歴史地理探析」（二〇一六年）の段階的成果である。